

土 淨

昭和十年五月二十日 第三種郵便物認可（毎月一回一日発行）
昭和二十四年四月二十八日 運輸省（特別毀承認雑誌）第三二五号
昭和四十九年二月二十五日印刷 昭和四十九年三月一日発行



第四十卷

第三号

1974

3



法爾自然（ほうにじねん）

書をものしていると、その時の気持が、こわいように紙面に表われてきます。同じく私の一生を通じての思想言動は、少しの左右凹凸はあつても、大体に一貫するものがあると思われまふ。

宗祖大師が一代仏教を開顕するについては法然房と号された御心地のままに、教えの高きを求めず、勝れたるものによらず、宇宙の大道に基づいて、人の内奥の願いに立つて、素直に如来の大願に順じて申すお念仏をお取りになりました。

春になれば草木は青い芽を萌いで、花はくれないの色を見せます。人が加工しても、つぎには、もとの自然に戻ろうといたします。宇宙大自然の大きな流れに棹して進もうとするところに破綻が生じてきます。人の心の動きもまた、同じく考えることができましよう。

法然上人が「炎は空にのぼり、水はくだりさままに流る」との仰せられたことを玩味したい

のであります。

石田典定

「東京藏前寺住職」

三
月
号



目

次

表紙「白椿」松濤達文画

浄土を求めて……………村上賢瑞(2)

私のすぎな經典のことば……………(5)

—水谷大成・安田卓全—

彼岸と報恩……………細田隆善(12)

法然上人霊場めぐり② 高松 法然寺……………村上博了(14)

選択集講話⑭ 念仏多善根篇……………田丸徳善(18)

經典に聞くシリーズ② 仏説無量寿経卷上……………村瀬秀雄(22)

「道」道あれこれ……………高橋良和(28)

韓国仏教雑感……………大南竜昇(30)

カット 大正大学美術部



浄土を求めて

村上賢瑞

(名古屋市東区建中寺住職)

春三月、弥生ともなれば、陽の光も一段と濃くなり、野山も川も海も、深い眠りからさめて、勇躍活動のきざしの見える、たのしい季節であります。

元祖法然上人が、浄土宗をお開きになったのは承安五年春三月であります。上人御年四十三歳の時であります。幾百星霜かさねまして本年は開宗八百年の佳辰を迎えたのであります。我が浄土宗門に於きましては、総本山知恩院を始めとして地方各寺院に至るまで、一斉に記念法要がとまる事であります。

さて昨年、石油危機発生以来、日本の国情は、まことに見るにしのびざる動揺ぶりでありました。物質の欠乏と物価の高騰による、買いだめ、買いあさりさわぎは、日本国民の醜態をさらけ出したと言わざるを得ません。「おごる平家は久しからず」という諺があります。戦後苦難の時機を過ごした我が国民は一躍経済大国にのし上がり、恰かも世界を制

霸したるが如き思い上がった慢心に、国民は酔っておりました。消費は美德なり、まだ充分使用にたえる物を、思いおきなく、どんどん、ごみとして捨てられたのであります。国民の風潮は、華美に流れ、若き男性が女性のような服装をして、しかも肩をもかくす長髪をして、得意顔して街を歩くがたは、何とも異様な姿であります。道徳の頹廃は著しいものがあります。嬰兒を物質同様ビニール袋へ入れて、ごみ箱に棄てるというひどいものでもあります。更に集団によるストライキの行使であります。年末交通々信のもっとも大量に、もっとも緊急を要する時に、国民の迷惑をも省みず、ストライキを行なう。しかもそれが国有鉄道であつたり郵政省であつたりするのは一体どういう事か、「日本政府の職員も、なんと墮落したものか」と、毎年々の瀬の迫る頃になると、その思いを新にするのであります。

冬の寒中でも、扇風機を使いたくなるほどの暖房のもと、夏の暑い時にはジャケツの一枚も重ねなくなる程の冷房完備のもとで、なるべく仕事を怠け、なるべく給料を多く要求し、来客に対する応待は、ツツケンドン、しかもいやな仕事は、アルバイトにやらせて手を出さない。その上週休二日制を強要している。これではいくら経済大国でも、たちまち崩潰してしまうでしょう。

此度の日本国に押しよせた経済恐慌は、来たるべくして来たものであり、日本人に対する警鐘であり警告であつたと思います。

近頃は人知によつて、自然を征服するとか、或は宇宙を征服するとか、途方もない言葉を極く当然の如く使われております。はたしてその資格があるでしょうか。吾々人間は征服されるべき自然の分身ではないでしょうか。それとも、自然や宇宙に対向し得る立場にあるのかどうかという事であります。

言うまでもなく人類は、歴史的に見て自然発生の経路をたどり、今日たま／＼地球上を

独占しているにすぎない。やがて大自然の中に融合されて行く事だろう。

してみると吾人は、大自然の中に羽含まれ無限に広がる大宇宙の中に、又無限に続く時の流れの中において、生存しておるのであります。勿論人間独りでは生存することはできません。量り知ることのできない深い因縁により存在を可能ならしめて、おるわけであります。量り知ることのできない尊い因縁こそ大慈大悲の阿弥陀如来様であります。大慈大悲の御仏に羽含まれ、仏飯を食し、仏衣に身をくるみ、仏宅に起居しておるのであります。日常生活すべて、万事万端、仏と共に在って、広大なる恩沢に浴しておるのであります。この事を自覚せずして、唯いたずらに自然を征服するとか、宇宙に挑戦するとかいう事は、かたく慎しんだ方がよいと思うのであります。

今日の世界で、日本人のみならず全人類が反省しなくてはならない最大なものは、報恩感謝の念を忘れている事ではないでしょうか。自己中心主義、物質主義、享楽主義に溺れて目的のない日々を送って居ることあります。

人生終局の目的は、極楽往生であります。万人がいただく理想の国は極楽浄土であります。浄土往生の因縁をつくらなくてはなりません。それには先づ第一に、日常生活であります。生活の基盤は信仰でなくてはなりません。信仰の内核は念仏を称える事であります。「いつでも、どこでも、だれでもできる」易修易行の念仏行によって、日常の生活を規制し、更に浄土を求めて止まざる信念こそ、極楽浄土往生の大願業力となるのであります。そして更にこの世を浄化し、報恩感謝の日暮しができ、崩れかかった社会を建てなおす原動力となるのではないのでしょうか。

浄土開宗八百年を迎え、たま／＼春三月、法然上人立教開宗に因んで、いささか愚見を呈し、各位の御叱声を仰ぎたいものであります。



私のすきな經典のことば

水谷大成

(浄土宗兒童教化連盟理事長)

「汝等比丘、若し諸の苦惱を脱せんと欲せば、当に知足を觀すべし、知足の法は即ち是れ富樂安穩の処なり、知足の人は地上に臥すと雖ども猶ほ安樂なりとす、知足の者は、天堂に処すと雖ども亦意に稱はず、知足の者は富めりと雖ども而も貧し、知足の人は貧しと雖ども而も富めり、知足の者は常に五欲の爲めに牽かれて、知足の爲めに憐憫せらる、是を知足と名く。」―仏遺教經―

お釈迦さまが聖寿八十歳二月十五日夜半、まさに涅槃に入りましたまわんとするに臨み、大慈大悲のみ意にて開示なさいましたご遺言の教訓ですから「仏遺教經」ともう

します。一節ごとに汝等比丘（なんだち比丘よ）と呼びかけて下さって、主として仏弟子出家の人々のための教誡のように思われますが、このご遺教は広く出家在家一切の仏教徒に、仏滅後の真実に幸福の生きる道を開示なされたのであります。数々の教誡の中の一節「知足の法」を私のすきな經典のことばとして掲げましたのは、すきと言うよりも、常に五欲にまみれた過去六十年の懺悔と発願、自性に対する戒めであるからです。くり返しくり返し拝読して来ましたということは、少年期にあまりにも悲惨な大寺院の忍苦の小僧生活が連続した為に、青年期にそれこそ乾いた大地があくまで水を呑み込もう

とする様に、飯食の慾と色情の慾と、財物の慾、名譽を求め、睡眠をむさぼるの慾、が人一倍はげしくて、いつも不知足の者であつたからです。

人は善い環境に住居を得るといふ事がその性格まで一変せしめるといふ利益をみとめなくてはなりません。

八歳で突然に父と死別しまして、大寺の小僧に貰われ、伊勢の商家の四男坊が俄に乞食の群れに投入せられたやうで、寒い深川の火もない冷たい板の間の寺生活が始りて、頼りとする育ての親ともいふ師僧にそれから三度も死に別れ、一番困つた事は高等小学卒業の年、来春は中学入学という時に師僧に死なれ、母とも慕つていた、実子のない寺の小母さんが寺から追い出され泣く泣く故郷へ帰つてゆくのを浜辺の船まで送つて行つた時のかなしみ、子供心にも「人生のたよりなき、思うままにならぬ世の中」腹さえ立つて来て、それから青年期のひねくれ者、反抗の日々、欲求不満の放浪の沙門だったのですが、ありがたくも三十にして良い土地に転住させて頂きました。今住む愛知県の特に西三河地方は浄土宗寺院も多く、法然上人の「現世を過ぐべきようは念仏の申さるるよう過ぐべし」にふさわしい土地で、お念仏申さずには居られない良風の環境です。遂に郷に入りては郷

にしたがうで念仏漬となりました。

逆縁も恩寵です。多年の忍苦耐乏の日々が少々の事に弱音を吐かない第二の天性を造りあげておいてくれました。「不自由を常と思へば不足なし」日課念仏の家康公の家訓通りです。戦中戦後三人前の活動もさせて貰いました。

意志は非常に堅固に持つて居ります。冷酒一升今でものめる体質なんです、飲みません。三五杯で盃を伏せます。煙草は二十五本でやめました。食事は外食の時は御飯一杯、後は一切衆生の為布施して頂く、味噌汁も一椀だけお代りはしません。母が思いやりのそれこそ美味しい「鯉こく」を癖がつくからとお代りをしなかつた時、さすがに厳しい母でしたが泣いてくれました。

戒は制止なり。——自分で自分に制止のきかない、いわゆるブレーキのきかない坊さんになることを、信心の深い母は一番きらいしました。私も今尚それを一番恐れております。

そして七十二歳の老僧と人は申しますが自分では坊主盛りは七八十じゃ、と年間二百数十日布教伝道に東西しながらも「われ聖教見ざる日なし」と元祖大師さまの真似をさして頂いております。命終の夕までに読了し得な

いでしょうが、まだ仏書を探り購求しておりますのは山の自然諸の如くねばり強いのです。

次に

情は深くあくまでも、と思っております。幼少から肉親の情愛に飢えていたからでしょう。欣慕の情からのお念仏と育ってゆきます。およそ社会が冷たくなってゆく時、物質の欠乏を補ってあまりあるものは愛情の深さ、あたたかい親切のつくしあいだと思うのです。親なし子の寺の小僧に注がれた愛情の涙雨を、どれほどうれしく頂いたことか往生の時来るとも忘れ得られないことです。

次に

智慧はあくまで広く深くきわめてゆく。お念仏は還愚痴の法然上人も智慧深広の徳者で在したのです。今の世代は知識あれども智慧のない人々が多くなりました。むしろ知識人ほどおのれは智者だとうぬぼれて居るのではないのでしょうか。お念仏申して如来の智慧光に照されますと、この無明愚痴の闇が破れます。難聴になって学校も中退しましたが三河の大先輩学僧方が、或は叱り、或はおだて、壮年期に至って此の愚凡の智慧の眼を開いて下さいました忘れられない恩恵です。

現代を生きるお念仏は「志は堅く、情は深く、智は広

く」物乏しくも心豊かに南無阿彌陀仏と申すことです。不可思議の弥陀の誓ひのなかりせば

なにを此の世の思ひ出にせむ（良寛上人）

真の知足の人は越後の良寛さまです。

よく近頃のはやり言葉で裸の原点を云々されますが、それこそお浄土の新生の菩薩、無垢の願生心に生きぬかれた禪者であって、浄土教の裸の原点を生活に体现してみせて下さったのは、好きな經典、好きな人、びったりの善知識です。この方です。

焚くほどは風がもてくる落葉かな

まだ物質豊富でぜいたくしつくる二年程前、美濃の谷汲山の近く稲富の井深の心楽庵（弁榮聖者の御旧跡）で、春の観音大祭、本堂いっぱい参詣者に、童心満々の越後良寛和尚の一代とその仏教の思想行動を、時間を忘れて説教した。座敷へ戻ったら若い庵主から「今時にそんな話をして下さっても時勢にも合わないが、真宗の信者もよろこばない」と小言を喰って叱られた。その時私は今にぜいたくの行詰りがくると予感がしていたから、ことさらにすぎな經典から知足の法を讀題とし、すぎな良寛さまを語ったのですが、読者の皆さん何と感じて下さいますか。

思えば八百年前開宗して下さった法然上人は、比叡黒谷の時代も諸宗歴訪の青年期も、壮年の伝道時代も、晩年の流罪の時も、心ゆたかに耐乏し念仏なされ、おそらく私のすぎなこの仏遺教経をいく度もいく度もごらん遊



『仏心とは大慈悲これなり。無縁の慈を以て諸の衆生を授けしもう』——観無量寿經——

私は今回インドのブッダガヤにおける日本寺の落慶法要出席を機会に、釈尊の御遺跡を巡拝してまいりました。

日頃三部經（無量壽經・觀無量壽經・阿彌陀經）を読んでいる時に出てくる舌をかみそうな文句が、「実は今自分が立っているこの場所なのだ。阿彌陀經をお説きになったのはあの説法壇に違いない」と身を以て感得した時の驚きと喜び——それは正に筆舌につくし難いもののご

ばしたのではなからうかと、今日も拙き筆を走らせながら、思っていることでございます。
（了）
どうぞ皆さんご健康で念仏を。

安 田 卓 全

（横浜市緑区心行寺住職）

ございました。幸なことに私共の一行中に服部英淳先生がおられましたので、重要な箇所々々で要点的な御講義を拝聴することができ、ますますその実感を深くした次第です。

こうした仏跡巡拝の旅を続ける中で、つくづくと感じたことは、インドの国民大衆の貧しさと、こうした風土の中に生れそして絶滅（五億七千万の人口のうち、仏教徒は三〇四％）していった釈尊の教えそのものについてでありました。インドの国民の貧しさと不幸は細かく分析すればいろいろの要素があると思いますが、釈尊の教え即ち仏教が絶滅したことと、決して無関係ではないと

信じます。

四千年もの歴史をもつという例のカースト制度——独立以来インド政府はこの制度の打破にのり出しているようですが、とても一朝一夕には改まらないことでしょう。奴隷階級に生れたら一生涯奴隷階級で、働いても働いても搾取されるだけというのは、働く意欲が湧いてこないのも当然です。しかもこの制度はヒンズー教の原型であるバラモン教と共に発生し、現在ヒンズー教徒が最も信仰するクリシュナ神の神話には、カーストの区別・責務・忠誠がうたい込まれているのですから、「宗教改革なしにはカーストからの解放もない」と言うてもよいくらいだと思います。カーストの最上位はバラモンの語そのままをとったブラーモン即ち司祭階級（僧職）であり、中央アジアからインドに攻めいつてこれを征服したアリヤン族が、祭政一致の思想を原住民に徹底させた結果、生れてきた階級と解せざるを得ません。ブラーモンは創造神ブラフマン（梵天）の口から生れたと言ひ伝えられています。

こうした——人間を差別し、支配・従属の征服者倫理観に対して敢然と抵抗したのが、実は釈尊であったので、人間の平等と人格の尊厳を説き、近代民主主義の先

ヒンズー教の「いけにえ祭」とやがて殺される「やぎ」



駆ともいふべき思想の開発に立ち上られた釈尊は、おそらく死をも覚悟せねばならないほどの決意を以て伝道なされたことでしょう。バラモンに対する抵抗、それは単なる宗教教義の闘いだけでなく、外来征服者に対するインド原住民の自由と解放を求める非暴力の闘いを代表するものだったと思わなければなりません。その意味で近代になってから、永年にわたるイギリスの植民地政策からの解放を叫んで、非暴力の独立運動を推し進めてき

たマハトマ・ガンジーの苦悩が、まざまざと思い出されてまいります。ちなみに無量寿経に「従右脇生」といって、釈尊がマヤ夫人の右脇より生れたことになっていますが、カーストの二位クシャトリヤは、創造神の脇下より生れたと言ひ伝えられ、釈尊のカーストがクシャトリヤであったことを端的に物語っております。土候国の太子即ちクシャトリヤ出身であったればこそ、バラモンに對する烈々たる闘志も自ら湧き起ってきたというわけで



観経とゆかりの深い霊鷲山々頂にて

ございましょう。

観無量寿経仏身觀の中で「仏心とは大慈悲これなり。無縁の慈を以て諸の衆生を摂したもう。」と喝破された釈尊の精神は、右に述べたような歴史的背景と虐げられたインド民衆の哀しみを抜きにしては、空虚な理解に終ってしまふものと考えます。大慈悲であればこそ、どんなに貧しく賤しい者であっても（インドでは最下層の人々のことを「不可触賤民」と称して、触れてはならないケガラワシいものとされてきました）、また仮に罪人であっても、救いの対象とされなければならぬのです。なんと宗祖法然上人の思想とよく似かよっていることでしょう。いや法然上人が浄土一宗をお開きになった機縁は、善導大師の観經疏にある「正宗分散善義」の「一心專念の文」によられた訳ですし、その後浄土宗中興の祖聖聞上人もその著「三六通裏書」で、「総じては三經、別しては一經に依る」と申されて、浄土宗が観無量寿經を重視してきた経緯を明らかにされておりますので、当然のことかも知れません。

しかし残念なことに、冒頭申し上げたとおり、インドでは仏教はヒンズー教に吸収されて滅亡してしまいました。釈尊は紀元前五二五年頃に成道され、その教えは紀

元前三世紀頃全インドを統一したアショカ王の深い信仰と被護のもとに大いに発展し、更に竜樹の出現により大乘仏教の華を咲かせて、五世紀にかけて最盛期を迎えたのですが、その後衰亡の時代に入り、ついに十二世紀に滅亡するに至ったとされています。そしてカースト制度と貧困とが残されたのです。ヒンズー教はまことに不可解な宗教で、牛を神の使いとみて殺さない反面、やぎ・にわとり等五種類の動物に限っては平気で殺し、いけにえとして神々に捧げる習慣を持っています。ネパール・カトマンズ郊外のヒンズー教の廟で、「ダクシン・カリ」と称するそのお祭の光景を見ましたが、血なまぐさい儀式は慣れない者にとっては吐気を催すような光景でした。しかし教徒は極めて敬虔で、その血を顔にぬり石造の神々の像に捧げているのです。ペナレスにおけるガンジス河の沐浴も、教徒にとっては法悦の境なのでしょうが、水をかぶり口をすすぐ傍で洗濯をしている人もいますし、死者を火葬してその灰を河口に投げ入れる場所が混

在しているのですから驚ろきです。沐浴はともあれ動物を宗教儀式として殺すことに反撥して、不殺生戒を強くとなえられた釈尊のお気持が、膚をとおして理解できた次第です。

いずれにもせよ、釈尊の人道主義に立脚した大慈大悲の教えが減んでしまったことは、インド民衆にとって不幸なことでした。宗教は政治とは別の次元に在るものですが、かといって全く遊離してしまっただけではありません。むしろ政治を指導するものでなければならぬでしょう。現在の世相の中で、人間の感情がトゲトゲしくなり、相互不信の念が助長されていくのを見る時、つくづく「釈尊の精神に還る」ことの必要性を痛感いたします。釈尊の精神とは大慈悲の精神にほかなりません。「仏心とは大慈悲これなり」——大乘仏教の基本理念が、わが浄土三部経の観無量寿経の中に明記されていることを誇りに思うと同時に、ますますその教化と実践に努めなければならぬことを思うや切です。

私のすきな經典のことば



深川や香煙ただよふ彼岸寺
關伽桶を手にする母子彼岸寺
無縁墓花供へある彼岸かな

(隆善)

彼岸は、日本だけにみられる古来からの美風であります。彼岸は、仏教思想に由来し、とくに浄土教の教理信仰にもとづく行事であります。そのおこりは古く、聖徳太子の四天王寺建立のときにはじまるともいわれていますが、平安時代からさかんにおこなわれるようになり、レジャー的な慣習までもりこまれるまでに親しまれてきました。彼岸は俳句の季節ともなり、秋の彼岸をとくに秋彼岸と称します。

平素は多忙にまぎれたりして、お墓参りもできないが、せめて彼岸中に参詣して、ご先祖や先亡の方々に墓参し、寺参りをいたしま

彼 岸 と 報 恩

す。家族そろって彼岸参りをするのは、まことにほほえましい情景であります。彼岸の行事のおこなわれるのは、報恩の心からでございます。

先般、一か月ほどアフリカ各地を歴訪してきました。西アフリカのガーナを訪れた時のことです。首都アクラ市は、海岸にある五十五万の都市、ココナツヤシ、火焰木、マロニエの木的美しい町でした。市の西部に、コルレブの国立病院があります。この病院の中庭に、野口英世博士の胸像がたっています。博士は、昭和三年、この病院で黄熱病研究中、この病に伝染し、五十三才でなくなられました。

野口博士は、明治九年、福島県猫苗代湖の翁島という寒村に生まれました。父は飲んだくれで怠けもの、母が夜を日について働き、ようやく糊口をしのぐという貧乏世帯でありました。英世二才のと

—東京都江東区勢至院住職—

細 田 隆 善

き、いろいろにころげ落ちて大焼傷をしました。医者にかける金のない母親は、一月つきっきりの看病をし、ようやく一命はとりとめました。が、左手はこぶしを握ったまま、指はくっついてしまっていました。

母親は、野良仕事ができなくなった英世を学問の道で身をたてさせたいと思い、小学校へあげ、夜を日について働きつづけました。英世は母親の苦勞に感謝し、一心に勉強したため、一番の成績で卒業しました。高等小学校へ進学させる力のない母親は、英世をあきらめさせました。ところが、猫苗代町からこられた小林試験官がこのことを知り、金を出し、進学させてもらうことになりました。

全校の生徒が、野口少年のために一銭二銭の金を集め、校長以下全部の先生が、小遣を集め、十円の金をもって、会津若松のアメリカ帰りの外科医渡辺先生の手術をうけることになりました。みんなの誠意が通じたのか、野口少年の左手の指が動くようになりました。野口少年の喜びは、たとえようがなく、このとき少年は、二つのことを決意しました。一つは、医師のありがたさをしみじみと感じ、病気に苦しんでいる人を救うため、医者になることを決意しました。いま一つは、母の恩、小林先生、学校の先生、生徒の恩に報いるため、りっぱな人間となって、世のため人のために尽くそうと決意しました。

以来少年は、一日三時間しか睡眠をとらないで勉強をつづけ、二十才でむかししい医学の検定試験にパスし、北里柴三郎博士の指導をうけました。アメリカのロックフニラー医学研究所員に選拔さ

れ、ベスト、毒蛇、梅毒の研究をつぎつぎ発表し、世界の最高医学者ドイツのエーリッヒ博士をおどろかせました。

そのころアフリカで毎年黄熱病のため、二十万、三十万の原住民が死亡していくのを知り、西アフリカに渡り、コルレブ病院で、研究しましたが、黄熱病にかかって惜しくも死去されました。しかしこの研究は完成し、昨年はアフリカから、黄熱病患者は、一名もでませんでした。この地球上から幾百万の命を呑んだ黄熱病は、姿を消したのであります。このような偉大な業績を残されるようになったのは、少年のころ医師、先生、生徒たちをはじめ、母の恩に感謝して、報恩の尊さに生涯を捧げられたからであります。

この病院を訪れたとき、日本から医学者四名が、妻子同伴で、伝染病と細菌の研究をつづけていました。これも野口博士の偉業をしたったことからです。

彼岸の行事は、感謝報恩の心を背景とする美風であります。肉親のご縁を大切にし、先祖を大事にすることは、日本人の古来からの美德であります。

x x x

アフリカの野口博士の業績を

若き医学生親しげに語る

病院の日本医学生の出身は

福島県と声高に答ふ

(降善)



法然上人 霊場めぐり

第二回

第二番札所

高松

法然寺

村上博了

法然上人二十五霊場第二番の札所は、四国高松市仏生山町法然寺である。

高松という名称、仏生山と云う町名も法然寺から名付けられたもので、高松市は法然寺門前町の発展したものであると見られぬ事もない、一言にして云わば、浄土宗祖念仏元祖法然上人の大功徳を讀える街というべきか。霊場御詠歌は

おほつかな 誰が云ひけん 小松とは

雲を支ふる 高松の枝

と云う。上人が建永元年（一二〇七）七十五歳の夏、讃岐国小（子）松庄生福寺に到着された時の御歌である。

この和歌を繰り返しくりかえし読む時には、自然と微笑が湧き上る。

上人が小松庄と聞えてお出でになったのに、松の太木が天空にそびえ立っている。その太木を見上たり見降したりしては、これはこれはとばかり、にこにことしておいでになる御姿が目の前に浮び出る。住みなれた花の京からは、遙るか海を越えた讃岐という異境にあるとは考えられない朗らかさが溢れている。

浄土宗開宗八百年慶讃記念

馬堀喜好画



法然上人四国御流罪の折逗留の図

<知恩院所蔵>

洒々落々とした一世の高僧の風格が然らしめたものかも知れないが、上人は生来素直な明るい性質のお方であったからであらう。

二

さて小松庄生福寺と法然上人との関係について上人四十八巻伝（勅修御伝）には

讃岐国小松庄に おちつき給にけり。当庄の内、生福寺といふ寺に住して 無常のことはりを説き 念仏の行をすすめ給ければ 当国近国の男女貴賤 化導にしたがふもののごとし。

と伝えている。

生福寺は真言宗寺院であったが、上人仮住せられるや、人生無常と念仏の有難さを説き、口称念仏をすすめられると、渴した者が、水をむさぼり飲むように、有難く受け入れた。而して上人の教化は

邪見放逸の事業（せけん）をあらため 或は自力難行の執情（かたくな）をすてて 念仏に帰し 往生をとぐるもののおおかりけり

と、毎日毎日を「おかげさま」と人々に了解され、明るい住みよい社会、生かされる喜びが人々にす直にうけ入れられたのである。一隅を照した訳である。諸人の喜悦を見ては、い

かに僻遠地であらうとも、上人は

辺土の利益を思へば 朝恩なりと よろこび給けるも ま

ことにことほりにぞおぼえ侍る

と、衷心から専修念仏を伝導出来る事を、朝恩なりと喜んで
いられるさまが、目に見えるようである。

三

上人は或る日庄内の綾川のほとりを歩るかれた。お伴の門
弟信空が何に心なく水面を見ると水に写る上人御姿の頭上に
「宝瓶」があつたのである。まごう方なく勢至菩薩の聖像で
あつた。世に宝瓶御影とたたえられる因縁にある。生福寺本
尊仏は阿弥陀如来一体だけであつた。上人が仮住の間に両脇
土観音勢至尊像を造り弥陀三尊仏も整える事となり、上人自
から勢至菩薩を彫刻されたのである。像に

法然本地身大勢至菩薩ナリ為度ニ衆生ヲ一故 顕置ニ此道場一
我毎日影向 擁護帰依衆ヲ一必引導ニ極楽一 若我此願
念不レ令ニ成就ニ者 永不レ取ニ正覺ニ

と書き加えられた。勅修御伝には、

勢至の化身としてみづからその体をあらは しなのり申さ
れける

と伝えられている。

又上人が塩飽笠島から讃岐小松庄に遷せられた頃のこと
である。近くの菅公旧社の滝宮に詣でられた。折しも田植盛
りの初夏、早天続きで農民は困却し滝宮に雨乞い祈願中であ
つた。上人は懇情もだし難く、農民と共に一心こめて百万遍
念仏会を修行されたのである。一七日満願に大雨沛然、万物生
氣をとりもどした。喜悅の農民達は、上人を囲んで歡喜の踊
りを行った。無形文化財として現存する。

かかる一連の尊い聖蹟は、上人が七十五歳の老令であつた
が、又慣れない風土の讃岐にあつても、全く健康体であつた
ことを物語る。

上人伝道が、広く深く各層の人々に行き渡つた事は、化
導を喜ぶ人々が門前市のごとしと伝えられることによつて
も、上人が不惜身命の教化であつたからである。

この靈跡生福寺も天正年中兵火のため炎上一片の灰燼とな
つてしまつた。

四

高松藩祖松平頼重（水戸光圀兄）公が常州下館から当地に
転封すると、上人の遺跡小松庄生福寺再興を発願、現在地に
仏縁を得得、竹井半斎を奉行せしめ、寛文八年六日起工、約
三千年の日時をかけて三十三門二十四宇の堂々たる仏閣諸堂



=法然寺全景=

を建立、聖地に平家池十蓮池前池を活用し、老松樹桜樹等を配し、清浄景観南海第一の大霊場とした。寺号法然寺は上人の功德遺跡を偲び、門前の「支雲の松」は往時を物語っている。

寺宝は旧小松庄生福寺跡発掘の「上人自作の真影」「上人念誦仏阿弥陀如来」「御使用の鉦」と麗版大藏経がある。寺の後の台地で風光明媚な内海を一望に眺められる頂上に「上人墓」を中心に松平家墓地を経営し、上人が智慧第一と讃いられた、その智慧の別名である般若をとって、般若台と呼んでいる。台下に来迎堂あり、弘法大師作と伝えられる阿弥陀如来と二十五菩薩像を安置し不断念仏道場としている。阿弥陀如来像は立像五尺八寸あり、白毫相には後陽成天皇御感得の仏舎で二品道晃親王に賜り、親王から頼重に贈られた仏舎利を白毫中に収めた。云わば念仏者頼重公悲願の霊仏である。

五

霊場法然寺には涅槃堂あり、涅槃曼荼羅を仏体で現した寝釈迦が安置されて、京都嵯峨の国宝釈迦像に対し、讃岐の寝釈迦として知られる。外に親鸞聖人像、骨仏、校倉式宝庫。なお行事として虫千会学忠上人忌は有名。近くに名所屋島、栗林公園、琴平社がある。

選撰集講義

第十三章段

念仏多善根篇

田 丸 徳 善

(東京大学助教授)

この章は、ふつう略して「念仏多善根篇」と呼ばれているが、正しくは「念仏を以て多善根と爲し、雑善を以て少善根と爲すの文」という。すなわち、法然上人はここで、念仏という行が多くの善を生みだすものであり、その他のすべての善行は少しの善しか生みださないとの趣旨を、いくつかの経文などを引いて明らかにし、もって念仏のすぐれた功德を説こうとされたのである。

もっとも、ここに集められているのは『阿弥陀経』の中の一文と、それについての善導大師の『法事讃』の中の註釈の文章との二つだけであって、けっして多くはない。『選撰集』の全巻を見わたすと、十六章段の中でも、

最も長いのは第八の「三心篇」であり、第十二「付属仏名篇」ならびに第三の「念仏往生本願篇」、第二の「捨難行帰正行篇」、第十六の「弥陀の名号を舍利弗に付属したまうの篇」などがこれについている。それに対して、本章は第十「化仏讃歎篇」や第五の「念仏利益篇」とともに、全巻の中でも最も短いものに属している。

しかし、短いからといって、それがあまり重要でないなどというのは、皮相な見方であるのはもちろんである。よく読んで行くと、この短い章も、実は『選撰集』全巻を流れている思想を受けつぎ、その全体の枠の中に、有機的に位置づけられていることがわかるである。

う。その根本思想というのは、前にも述べたように、念仏のすぐれた力への確信にほかならない。

このことについては、後にもう一度あらためて考えてみることにして、まずこの章の内容をかんとんにたどることにしよう。

この章は、冒頭に阿弥陀経の次のような箇所を掲げてある。

「少善根福德の因縁を以て、かの国に生ずることを得べからず。舍利弗よ、もし善男子・善女人あって、阿弥陀仏を説くを聞きて、名号を執持することもしは一日、もしくは二日、もしくは三日、もしくは四日、もしくは五日、もしくは六日、もしくは七日、一心不乱なれば、その人、命終の時に臨んで、もろもろの聖衆とともに、その前に現前したまう。この人終る時、心顛倒せずして、すなわち阿弥陀仏の極楽国土に往生することを得。」

この箇所は、『阿弥陀経』の中でもほぼ中程にあたり、念仏によって阿弥陀仏の浄土、すなわち極楽に生まれることができるということを述べた、最も重要な部分である。それは、いわばこのお経のクライマックス（極点）ともいふべきもので、さらに、たとえばわが国でも、中

世いらい大きな影響を与えた、いわゆる「臨終来迎」の考えのもとともなったものである。ここでは往生ということが、とくに死という、人生の区切りになる最も厳粛な事実と結びつけて考えられており、死に臨む人の一人々々を、阿弥陀仏が親しく迎えられるという「来迎」が説かれている。それは、いうならば絵画的な美しさをもったイメージといってもよい。そして、実際に、それが屢々そして好んで絵画の題材とされたことは、よく知られるとおりである。

しかし、このように右の文章の後半で強調されている来迎という形の往生は、念仏という修行によってのみ、実現されるのである。念仏、つまり阿弥陀仏の名（名号）をしつかりと心にきざみ、口に唱えて、一心不乱につづけること（執持）が必要なのである。右の文章の前半は、もっぱらそのことを述べており、極楽に生まれ、救われるためには、他のいかなる行いにもまして、念仏が必要であることが強調されている。

次に本章は、右の阿弥陀経の一節を説明した善導大師の『法事讃』の文章を引いている。

「極楽は無為涅槃の界なれば、随縁の雑善、恐らくは

生じがたし。故に如来、要法を選んで、教えて弥陀を念すること、専らにしてまた専らならしむ。七日七夜、心無間に、長時の起行もますますみな然なり。臨終に聖衆、華を持して現ず、身心踊躍して、金蓮に坐す。坐する時、すなわち無生忍を得。一念に迎將して、仏前に至る。法侶、衣をもつて競い來つて著せしむ。不退を証得して三賢に入る。」

ここで善導大師は、阿弥陀仏の浄土、つまり極樂を、迷いをはなれた悟りの世界（涅槃）とし、そこへの往生のために念仏が、そして念仏のみが必要であるという。極樂がそうした涅槃の世界であるとして、両者を同一視した点は、『阿弥陀經』の一節にはふれてないところで、善導大師のつけ加えた解釈であるといえる。しかし、それ以外の点では、この註釈はお經の文句をほとんど忠実に再現したものにほかならない。しかも、後半の臨終に極樂に生まれる有様を述べたところは、お經よりはるかに微に入り、細をうがっていることに注目する必要があるであろう。善導大師は、よく詩人的な素質ゆたかな人といわれるが、ここにもそうした詩的な想像力の働きの読みとられるのである。

さて、右のような二つの文章を掲げるところとして掲げたのち、法然上人は、自らの考えを、いわゆる「私釈」の形で述べられる。これは、いうまでもなく『選択集』全巻をつうじてみられる形であって、法然上人の独自の立場は、実は主としてこの私釈の中に表現されているのである。

一般に、独創的であることに大きな価値をおく近代人と異つて、以前の人びとは、はるかに謙虚であつた。かれらは、自己を表面におしだす代りに、まず公けに認められた曲拠を尊重したのである。法然上人もまたその例にもれない。しかし、そうした謙虚さは、けつして独創性が欠如していることを意味するのではなく、逆にそれは、与えられた曲拠の取扱ひ方の中に、はっきり示されているのである。

すでにみたように、『阿弥陀經』の文章もそれについての善導大師の註釈も、二つの主題をふくんでいる。すなわち、念仏が浄土に生まれるための必須の条件であることの強調、および臨終の来迎ないし往生の描写である。ところが法然上人の私釈では、臨終に際しての往生の様相を描くという後者の主題は、まったく普及されな

いままにおかれ、もっぱら念仏が往生という善をもたらしものである点が、前面に押しだされている。言い換えれば、経文や善導大師の註釈の中でも、主に前半の部分のみが取りだされているのである。

「……少善根とは、多善根に対するの言なり。しかればすなわち、雑善はこれ少善根なり。念仏はこれ多善根なり。」

雑善、すなわち種々の善行は、けっきょく、阿弥陀仏の浄土への往生という善き結果をもたらさないのに反して、念仏こそは、それを可能にする故に「多善根」といわれるのである。この相違は、また大小、勝劣ともいわれている。

「ただに多少の義あるのみにあらず、また大小の義あり。いわく、雑善はこれ小善根なり、念仏はこれ大善根なり。また勝劣の義あり。いわく、雑善はこれ劣善根なり。念仏はこれ勝善根なり。」

要するに、法然上人は、お経や註釈の中にふくまれたいろいろな主題の中から、念仏のすぐれた功德という唯一つの思想を「選択」して、それを自らの立脚点とされたのであった。そしてさきにもふれたように、このような選択の中にこそ、その独創性があるといっても過言で

はなからう。

右のようにみえてくると、この章の内容が、念仏こそ「往生のための業」であるという『選択集』の全巻を一貫する思想に直接つながるものであることがわかる。しかも、その場合、念仏とそれ以外のさまざまな善い行いとが、主として多少、勝劣の関係として捉えられていることに注意しなければならない。このことは、すでに第三章段「念仏往生本願篇」などにも論じられた、いわゆる「勝劣、難易の義」とも関連する。そこでは、念仏をすすめる理由として、それが他のさまざまな修行に比してすぐれているからという理由と、それが他よりやさしい「易行道」だからという理由とがあげられていた。しかし、『選択集』の中では、念仏こそ易行であるという見地は、ごく最初にてでくるだけで、概していえば、念仏こそ最もすぐれた行であるという見地が、後ほどより強くなっているといえる。なぜそうなったかを考えることは、ここではできないが、いづれにせよ、ここに『選択集』を理解するための一つの手がかりがあることはたしかである。



仏説無量寿経

卷上（第二回）

村 瀬 秀 雄

経典に聞くシリーズ

一 国王の出家

時有二国王一。聞二仏説法一、心懷二悦予一。

尋発二無上正真道意一、棄レ国捐レ王行

作二沙門一、号曰二法藏一。高才勇哲与レ

世超異。詣二世自在王如来所一、稽二首

仏足一、右繞三市、長跪合掌、以レ頌

讃曰。

時に国王あり。仏の説法を聞いて心に悦予を懷く。すなわち無上正真の道意をおこし、国をすて王をすてて、行じて沙門となり、号して法藏という。高才勇哲にして世と超異せり。世自在王如来のみもとに詣でて、仏足を稽首し、右に繞ること三そうし、長跪し合掌して、頌をもつて讃じてもうさく。

（意訳）世自在王仏と同じ時代に一人の国王がいた（名は離垢浄王又は無諍念王という）。国王は世自在王仏の説法を聞いて、いつも心楽しく喜びにしたっていた。そこで自分もこの上もなく最高で正真の悟りを求めたいという心をおこし、国をすて王位から退き、出家して名を法藏と改めた。法藏比丘は豊かな才能と勇氣と智慧とにめぐまれ、世人よりは

るかに勝れた素質をもっていた。法蔵比丘は世自在王仏のみ許にゆき、頭を深くさげて仏のみ足をいただき、仏の周りを右から三回めぐり、跪いて礼拝し、合掌してから讃歌をもつて仏のお徳をたたえた。

二 仏の威徳（歎仏偈上）

光顔魏魏 威神無極 如レ是燄明

無二与等者一 日月摩尼 珠光燄耀

皆悉隱蔽 猶若二聚墨一 如来容顏

超レ世無レ倫 正覺大音 響流二十方一

戒聞精進 三昧智慧 威徳無レ侶

殊勝希有 深諦善念二 諸仏法海一

窮レ深尽レ奥 究二其涯底一 無明欲怒

世尊永無 人雄師子 神徳無量

功勲廣大 智慧深妙 光明威相

震動大十

光顔は魏々として、威神はきわまりなし。かくのごとき燄明はともに等しきものなし。日月と摩尼珠光は燄耀なるも、皆ことごとく隠へいして、なおし聚墨のごとし。如来の容顔は世に超えてともがらなし。正覺の大音はひびき十方に流る。戒聞と精進、三昧と智慧、威徳はともがらなく、殊勝なることは希有なり。深諦としてよく諸仏の法海を念じ、深をきわめ奥をつくして、その涯底をきわむ。無明と欲と怒とは世尊は永くなし。人雄師子の神徳は無量なり。功勲は広大にして智慧は深妙なり。光明の威相は大千を震動したもう。

（意訳）

如来の輝くお顔は高く大きくて気高い。如来の聖徳はこの上もなく尊い。このようなお顔の輝きは他に較べるものがない。日の光り、月の光り、摩尼宝珠の輝きがいかに熾烈であっても、如来の前では皆ことごとく姿をかくしてしまい、輝きを失って墨をぬったように暗い。如来の顔だちはこの世に較べものがない位に勝れている。如来が説法するときの大音声は、あらゆる世界に響きわたる。如来は持戒と精進と正定

と智慧とを成就したまい、そのご威徳は他に類がなく、その殊勝さは稀れにみる場所である。如来は深い真実さをもつて十分に諸仏の教えを念じ、その深奥をきわめ尽し、その奥底にまで達している。愚かさや貪りと怒りとは如来の断絶し給うところであつて、如来には全くないのである。如来は人中の雄であり獅子王であつて、その威徳ははかり知れない位に大きい。如来のいさおは広く大きく、智慧は深く勝れている。如来の光明のありようは、全世界を震動させ給うところのものである。

三 法蔵比丘の決意（歎仏偈下）

願我作仏	童二聖法王一	過二度生死一
靡レ不二解脱一	布施調意	戒忍精進
如レ是三昧	智慧為レ上	吾誓得レ仏
普行二此願一	一切恐懼	為作二大安一
假使有レ仏	百千億万	無量大聖

数如二恒沙一	供二養一切	断等諸仏一
不レ如二求レ道	堅正不レ卻	譬如二恒沙一
諸仏世界	復不可計	無數刹土
光明悉照	徧二此諸国一	如レ是精進
威神難レ量	令二我作仏	国土第一一
其衆奇妙	道場超絶	国如二泥洹一
而無二等雙一	我当四哀二惑	度三脱一切一
十方来生	心悅清淨	已当二我国一
快樂安穩	幸仏信明	是我真証
発二願於彼一	力二精所欲一	十方世尊
智慧無礙	常令三此尊	知二我心行一

仮令身止二 諸苦毒中一 我行精進

忍終不悔

願わくはわれ作仏して、聖法王にひとしく生死を過度して、解脱せずということなからん。布施と調意、戒忍と精進、かくのごときは三昧と智慧とをすぐれたりとす。われは誓う。仏を得るまでにあまねくこの願を行じ、一切の恐懼に、ために大安をなさん。たとい仏ありて百千億万無量にして、大聖の数は恒沙の如くならんに、一切のこれらの諸仏を供養せんより、道を求め堅正にしてしりぞかざるにはしからん。たとい恒沙のごとくなる諸仏の世界、また不可計無数の刹土ありて、光明はことごとく照して、このもろもろの国にあまねからん。かくのごとくに精進にして威神ははかり難からんに、わが作仏の国土をして第一とならしめん。その衆は奇妙にして、道場は超絶し、国は泥洹のごとくにして等雙なからん。われはまさに一切を哀愍し度脱すべし。十方より来生せん者は心悅清浄にして、すでにわが国に到りなば快樂安穩ならしめん。こいねがわくは仏よ信明したまえ。これはわが真証なり。願をかれにおこして、所欲を力精せん。十方の世尊の智慧は無礙なり。常にこの尊をしてわが心行を知ら

しめん。たとい身はもろもろの苦毒の中に止むとも、わが行は精進にして、忍びて終いに悔いざらん。

(意訳) 願わくは私もまた仏となつて、世自在王仏と同じく生死の世界を抜け出して、迷いの世界から離脱して絶対自由の境地に到達したいものである。そのための修行を積むに当つては布施を行い、慳貪の心を調伏し、戒律を保ち、各種の侮辱や迫害を忍受し、精進努力を行うのであるが、中でも心身統一の瞑想にふけり、事理を照見して正邪を分別することが最も勝れた行であるとして修行する。私は次のことを誓う。私は仏となるまでこの願いをすべて修行するであらう。そして生死の苦に恐れ戦く一切の人々を救つて、心身ともに憂いと苦病のない安樂を与えるであらう。たといここに仏がいて、その数が百千万億という数えきれない位に多くの仏がいたにしても、これらの諸仏に供養を捧げるよりは悟りの道を求め、堅固に正しく修行を続けてやめないことこそ勝れているとするであらう。たとえば無数の諸仏世界があつて、これらの数えきれない多くの国土がいずれもあまねく光明に照され、その国土がはかり知れない精進と聖徳とによつて満されていたにしても、私が仏となつて構える浄土は、これらの多くの国土のうちにあつて第一等の国土となるであらう。従つて浄土にいる人々は特に勝れた人々であり、浄土の道場は

他に類のない勝れたものとなるであろう。このように浄土は悟りの世界であって、他には決して見られないところのものとなるであろう。私はまさしく一切の人々を哀れみ、苦の世界から悟りの世界にわたすであろう。あらゆる世界から浄土に往生してくる人々は悦びにひたり清浄な心をもつ人々であって、浄土に往生してからはあらゆる楽しみを受け、安穩に過すことになるであろう。こいねがわくは世自在王仏よ、私の願いと決心が誠実であることを証明していただきたい。この証明こそ私にとって真の証明となるのである。ここにおいて私は本願をおこし、自分の欲する所に向って努力精進するであろう。すべての仏たちは妨げられることのない智慧をお持ちであるから、仏たちもまた常に私の願うところを知っていただきたい。たといわが身が多くが悪苦に沈むことになろうとも、私は修行に努力し、忍耐強く続けてゆくことに決して後悔しないであろう。

四 浄土を選択する

世自在王仏即為広説三二百一十億諸

仏刹土天人之善惡国土之麤妙一、応二

其心願一悉現与レ之。時彼比丘聞二仏

所説厳浄国土一、皆悉觀見超二発無

上殊勝之願一。其心寂靜志無二所著一、

一切世間無二能及者一。具二足五劫一

思二惟撰三取莊嚴仏国清浄之行一。

世自在王仏は即ちために広く二百一十億の諸仏刹土の天人の善惡、国土のその妙を説き、その心願に應じてことごとく現じてこれを与えたもう。時にかの比丘は仏の所説の厳浄の国土を開き、皆ことごとくと見して、無上殊勝の願を超発す。その心は寂靜にして、こころざしに所著なく、一切世間のよく及ぶ者なし。五劫を具足して、莊嚴仏国の清浄の行を思惟し、撰取す。

(意訳) 世自在王仏は法藏比丘のために、広く二百十億という多数にのぼる仏国土について、そこにいる人々の善し惡し、また国土の優劣の有様を説き明した。更に仏は法藏比丘の心の願いに應じて、これら仏国土のすべてを眼の前に現わ

し、比丘に見せしめられた。このようにして法蔵比丘は世自在王仏が説き明して下された清浄に莊嚴されている多くの仏国土の有様を拜聴することができ、更にこれら仏国土のすべてを現に目でみて、その上でこの上もない勝れた願いをおこした。この時の法蔵比丘の心はすべての煩悩を離れて平静であり、志として少しの執着するものがなく、その心情は世間

好著紹介

寺内大吉著『他力本願』

発売してすでに十カ月を過ぎた今、改めて紹介でもないが、浄土宗開宗八百年を迎えるにあたって法然上人がこの世に提唱し、中世以後今日まで、その教えの影響力の大きさを看する時、またその目指された道を、原点から考えなおすに格好の指南書といえる好書であるからだ。

「おのれひとり生きて往けるか」というサブタイトルがついている本書は、著者が前作『仏教入門』（三崎書房刊）において、經典のことはや先人のことはを引いて、仏教を平易に紹介したのに続いて、更に一歩進めて

の人々のとうてい及ぶところではなかった。このようにして法蔵比丘は五劫という実に長い期間にわたって、自らが仏となつて構える浄土をどのようにに莊嚴したらよいのか、そのためにはどのような清浄の行を修めたらよいのであるかについて思考し続けた。その結果、自らが行うべき清浄の行を選びとつた。

念仏門に生きる自らの体験を通して、日本念仏宗の流れを、高名な念仏者（法然・親鸞・一遍・蓮如）の語録を引いて紹介している。

中世以後の日本思想史を見る時、法然上人が示された、この他力本願の思想は、まことにはかり知れない影響を各方面に与えている。しかし、この「他力本願」を「他人まかせ」と、誠に無責任な理解をしてはいないだろうか。今のこの書に接する時、そうした気持ちから素直にぬけだすことができ、本当の「他力本願」の生活を見出すことができるような気がする。是非一読したい好著である。

発行所

東京都文京区本郷一―二―五二

昭文社出版部

道

道あれこれ

高橋良和

二年余にわたって法然上人が歩いた道を書いていると、最近にいたって、岡山の誕生寺から比叡山まで法然上人の幼児勢至丸が歩いた道を一度歩いてみたいから、その道順をおしえて欲しい、という連絡を数人の方々からうけた。

これもなんとかして紹介したい、と思っているうちに「浄土」への執筆もこの号で終るので、詳しいことは他日他の書物にでも執筆したいと考えているので、その点を了解して欲しい。

誕生寺というのは、法然上人の父、漆間時国の邸宅であるが、その誕生寺を建立したのは、勢至丸に付添って比叡山まで赴いた福岡栃之介なる人物と、その夫人であるお社（こそ）の二人によって創建されたというのが誕生寺の縁起であって、誕生寺というのも詳しくは誕生律寺であり、その山号が栃社山（とちこそさん）となっていることでもうなずけるの

である。その辺の調査は今後の問題として資料を探したいと思っている。

ところでその誕生寺に本尊として法然上人の像をもっていたのは熊谷蓮生であったが、その蓮生が上人像を背負ってこの誕生寺にきたときに休息した橋が誕生寺の門前に残っている。

誕生寺駅で下車して、津山線の陸橋の下を通過して誕生寺の山門がみえるところにある橋で、ほんの一米半ばかりの狭い川の橋であって、その両側に柱が四本だけ残っている。その柱をみると、四本ともに南無阿弥陀仏という名号が彫まれているのがうっすら目につく、この橋が念仏橋である。

熊谷蓮生がこの橋のところに腰をおろしたという伝説があるのもうなずける。その橋のあるところから誕生寺にいかずにうしろにかえつてくると左に入る道がある。これが勢至丸

が比叡山に赴くときに歩いた道である、とつたえられている。決して幅のある道ではない、ほんの一米あまりの道である。

誕生寺に参る度に住職の漆間徳然師に案内していただいで、誕生寺周辺の道を走ったが、その一つ一つに八百五十年前の昔が偲ばれて、ただ去りにくいような郷愁を感じるというのも、その道が祖師につながるからであらう。

どうしても美作から京都までの道を歩いて、祖師の心にながりたいと思っている。

何度もうのように、法然上人の行動半径に岡山から、京都、そして四国とまことに狭い筈であるのに、青森にある浅虫温泉には、法然上人が通った温泉であるという表柱さえ立てられているのにおどろく。

法然上人のどの伝記をみても、青森までの足跡はないのに、どうして法然上人の回った温泉というのであらうか、おそらくこれは金光上人の回った温泉であると思うので、それがいつかしらぬ間に法然上人ということになってしまったのであらう。

今更それを訂正して、真実はこうであるという必要もあるまい。

大阪四天王寺での饑餓の人々に、粥を施す僧のあることを

夢みた高野の明遍の僧都ことが記されているが、それもこのころでは法然上人であると語られるようになっていく。

伝説はいろいろと派生物が出来てきたほうがたのしい。そのことから法然上人の人がらを見出すようにしたいものである。

いろいろと道を訪ねていると、この間も誕生寺にさる九州の郷土史家から、法然上人の生誕の地は、福岡県の筑紫であって、その下見というところに両幡が流れてきた椋の木があるという話を聞いた。

ではどうして美作の国となっているのか、と聞くと、勢至丸の誕生後、父の時国が転勤になって美作に移ったというのである。これも新しい資料の一つであるから、この福岡県の道も調査したい、と思っている次第である。

四国からの帰途勝尾寺に滞在したときに赴いた道もまだこの道であったか調査していない。

そしてこの勝尾寺へも、和歌山からなのか、あるいは陸路からなのか、それも疑問である。そんなことを開宗八百年もあと二カ月に迫った今日、問題にする必要もないだろうが出来るならはつきりしたい。祖師の足跡をまとめたかと思っている。道の執筆の最後になって、道あれこれを書いた次第、またの機会に続篇を執筆したいと考えているので協力して欲しい。



韓国仏教雑感

大南龍昇

(大正大学仏教学助手)

印象というものは、時がたつにしたがつて薄らいでしまふ。このたびの韓国旅行の思い出も、三カ月もたった今では、正確に記録することはむずかしいようだ。

仏教では、六根六境といつて、眼耳鼻舌身意の六つの感覚器官と色声香味触法という六つの対象から、それぞれの知覚や認識、すなわち六識が起るといふことをおしえている。いわば印象はこれらの認識作用の強弱によって、持続したり、消滅したりするのだから、それこそ六根清浄にしておかなければ、正しい知覚も美しい印象も残らないのであらう。

いずれにしても、こうして心を静めてみると、六識に写された印象のいくつかが呼びおこされてくる。赤青黄緑白など

の極彩色を基調として書かれた宮殿、寺院の円柱・壁画・天井の文様。古典民族舞踊に見た色あざやかな女性の衣裳。楽器の奏でも独特の音いろ。二百人近くの僧侶（それもみな独身僧だと聞く）がいる海印寺というお寺で聞いた読經の素晴らしいハーモニー。韓国料理の強烈な匂い、—辛い味。ゼミナールが終つて開かれた交歓パーティで、日韓の学者者が互いに握手しあつた時の温かい手の感触など。これらの印象はこのほか強く今でも鮮やかに思い出すことができる。

ところで、今回の訪韓の目的は、大正大学の仏教学研究室と韓国の東国大学との間で開催される仏教学術交流ゼミナールに参加することであつた。東国大学は曹溪宗という韓国禪



宗の一派の宗立の総合大学である。

ゼミは、曹溪宗の所依經典である金剛般若經をテーマにして、両大学から六名の研究発表が行われ、参加者全員で自由討論を行うものであった。このような形式で、日韓仏教者の交流が計られるのは、はじめてとあって、会場には、学生のほかに、灰色の僧服を纏った多数の僧侶の姿もみえ、このゼ

ミに寄せられた韓国仏教界の期待を大きさを改めて思い知らされた。ゼミは幸い大成功に終ることができたが、このために寄せられた東国大学の御厚情に対して、われわれは心から謝意を表せずにはいられない。韓国の仏教学者、とりわけ若い学究者と親しく交流できたことも大きな喜びであった。これらの大半は在家の出身者である。

韓国の仏教は出家仏教といわれている。僧侶は、山中の寺に籠り、修行を専一にする。そのため伝導能力が弱く一般市民との交流は鎖されがちである。これに対して、キリスト教は都市において、活発に布教し、インテリを中心に深く浸透している。先般話題となった金大中氏が、帰国後の記者会見で、まず最初に自分が無事であることを神に感謝したいと表明したことは、われわれの記憶に新しい。

これらキリスト教の攻勢に対処するためにも、韓国の仏教者は、今真剣にその行くえを考え、仏教研究や布教の現代化を計ろうとしている。従来、仏教と庶民のつながりを保ってきたものは、葬儀、祈禱などの儀礼であった。この儀礼仏教に現代的に表現された思想信仰を注入することによって、新しい仏教運動を呼びおこそうとかれらは願っているにちがいない。このたびの学術交流も、この目的の一翼を任うものである。韓国仏教の将来を任うものとして、これらの若い

家の学者のもつ役割は大きいといわなければならないであろう。

訪韓の第二の目的は、韓国仏教の現状をこの眼で見ることであつた。限られた時間では、それも十分果せるはずもないが、せめて雰囲気だけでもというのが、われわれの切なる願ひであつた。訪れた海印寺・仏国寺・通度寺・梵魚寺は代表的寺院であるが、これらの寺に宿泊、参拝することによつて、韓国僧侶の生活の一端を窺うことができたことは、今回の旅行で、なにもものにも代えがたい貴重な経験となつた。

ところで、韓国を訪れるにあつて、わたしには秘かに期待するものがあつた。それは、仏国寺石窟庵の本尊仏、釈迦像をぜひ拝観したいということである。この仏像は、七世紀に製作されたもので、新羅芸術の代表傑作という呼び声が高い。

仏教美術史上、この石窟庵の石仏の製作に続いて、世界史上、二つの勝れた仏像が生れている。一つは、奈良東大寺の大仏、そしてもう一つは、八世紀の成立とされるインドネシアのポロブドール・ムンドウツトの本尊釈迦像である。これらの三大仏像が、七・八世紀の間にインドネシア・韓国・日本の三国に相前後して製作されていることは、歴史の偶然ともいふべきであらうか。

先年、ポロブドール仏跡調査に加わつた時、ポロブドールの周辺寺院の一つであるムンドウツト寺を訪れ、そこで、仏教美術史上最高傑作とされる如来像を拝した。サルナート系といわれる石造の釈迦仏は、高さ三メートル、転法輪印を結ばれ、脇侍、従えて、椅子に坐しておられる。その端正な姿をわたしは今でも忘れることができない。その折、この仏像と前後して製作されたという石窟庵の石仏の話聞き、いつの日かその石仏にお会いしたいと切に思つたのである。

石窟庵は仏国寺の裏山の山上にある。仏国寺に宿泊した翌早朝、山上から望む御来光が美しいという期待も合せて、石仏参拝に出かけた。しかし、山登りは、寒さも加えて思いのほか、厳しくそれだけに石仏を拝した時の喜びは、ひとしおであつた。釈迦如来の坐像は、高さが約三、四メートル、幅が約二、六メートル。良質の真白な花崗岩でできたお姿は、均整美と重量感に溢れ、慈悲を湛えた温和な面立ちが素晴らしい。釈迦像は、東方に向つて坐しておられる。石仏のお顔は、東海に朝日が昇ると同時に、その光を受けて、突然血が通ひ出したかのように変貌し、刻一刻光彩を加えて、さんと照り映えるといわれる。まさに自然の靈妙さを計算した設計者の叡智のおかげで、光顔魏々とした釈迦像をわれわれは、今でも拝むことができるのである。

「浄土」開宗八百年記念号予告（四月号）

法然上人と浄土宗開宗

法然上人の浄土宗開宗

佐藤 密雄

法然上人と現代

竹中 信常

対談 法然上人を語る

寺内 大吉×梶村 昇

浄土宗のおしえ

浄土宗のおしえ

佐藤 良智

法然上人と浄土三部教

真野 竜海

法然上人のご法語

宮林 昭彦

浄土宗の信仰と生活

浄土宗に伝わる民俗信仰

中村 康隆

浄土宗の行事

安居 香山

浄土宗の流れ

中国浄土から浄土開宗まで

佐藤 成順

日本浄土教の展開

佐藤 行信



上記企画にて製作中です。内容をみても開宗八百年を記念するにふさわしいものと自負しております。記念法要等の施本などにひろくご利用下さい。詳細は本会までご連絡下さい。

「浄土」購読規定

一部 定価 百三十円

（送料十二円）

会費一カ年金一、五〇〇円

（送料 不要）

浄土 三月号

昭和十年五月二日

第三種郵便物認可

昭和四十九年二月二十五日

昭和四十九年三月一日

印刷 発行

定価 百三十円

編集人 宮林 昭彦

発行人 佐藤 密雄

印刷人 関 二男

印刷所 三幸社印刷所

東京都千代田区飯田橋一ノ十一ノ六

発行所 法然上人顕仰会

電話東京二六二局五九四四番

〒一〇二 振替東京八二一八七番

絵伝『法然上人』

かねて若い世代にむけての伝道文書をとの声しきりでしたが、このたび開宗八百年記念出版として、勅修御伝にのつとつた新しい感覚の絵伝『法然上人』が発行となりました。

青少年はもとより、博い層にわたる檀信徒方への施本として、開八慶讃法要などの機にご利用頂きますれば幸甚です。

B5 変形版 (タテ20cm × ヨコ22cm) 24頁

定価	180 円	〒 80円
50冊以下	単価 180 円	送料実費
50冊以上	" 170 円	
100冊以上	" 160 円	} 送料無料
200冊以上	" 150 円	
500冊以上	" 140 円	
1000冊以上	" 135 円	

京都市東山区林下町

発行所 浄土宗宗務庁

浄土宗開宗八百年記念トラクト 『法然上人と浄土宗』

B6判 96頁 定価 250 円 (〒 70円)

(200部以上 単価230 円 送料実費)

内 容

- 第一編 法然上人のあゆみ
- 第二編 浄土宗のおしえ
- 第三編 信徒の心得

附 法然上人略年譜・参考文献

開宗八百年の聖辰を迎えました。本会ではこの慶祝を期しトラクトを作成いたしました。檀信徒用施本・慶讃法要記念品などとして広くご利用下さい。

〒102 東京都千代田区飯田橋1-11-6

発行所 法然上人鑽仰会

電話 (03) 262-5944 番